NO2

野鳥の会幹事　村上利治　　NO.1.

本州最南の大塔山系を鳥獣保護区に

大塔山系に棲んでいる動物、（獣、鳥、魚）

○ 昭和30年頃まで

・ニホンオオカミ　……2以上 ～ 数匹
・山犬　……10以上（炭焼の犬とニホンオオカミの混血したもので、人間とは関係なしに狼と同じように山の獣道をとおって生活しているもの。）
・ツキノワグマ　……10以上　大塔山北側の国有林に多くいた。
・イノシシ　……多数。　大塔山を中心として、尾根変わりをして生活している。
・シカ　……多数、
・ニホンカモシカ　……500以上、大塔山を中心として半径やく10Km程の円内の山岳地が本来の棲息地
・オシドリ　……冬期、100～500程の群が、いく群もとんでいた　夕方、川の上空など空が黒くなる程とんでいた。源流ふきんでは、各谷にびっしりあふれる程みられた。（クシの実を食べに来ていたもよう）
・キツツキ　……多数、いつもコン、コーンと木をつつく音がきかれた。
・山ドリ　……非常に多かった。
・アメノウオ　……非常に多く、谷の上流では、かんたんに手でつかめた。

○ 昭和40年頃

・ニホンオオカミ……2匹の足あと（生きのこり）冬期2月頃 大塔山ふきんでは、雪の上によく二匹組の足跡がみられた。
・山犬　……昭和43年頃、大塔山の北側国有林の大伐採の頃より、散々ごご里出てニワトリを捕り、毒殺される（本宮町、川湯地区等）
・ツキノワグマ　……10以上、冬大塔山ふきんを、うろうろと歩きまわる　ツキノワグマは、大塔山のものは、冬眠しないのか、動きまわっているのは、牡だけか、又は、餌の関係か、それとも住みかがなくなったのか？
・イノシシ　……この頃より、よく里近くに出るようになる　紀伊半島の広域伐採が進み、住む場所のなくなったイノシシが、600～700頭も大量に奈良県北部地方に移住したのもこの頃である（他に移住したイノシシは、自分の生活路をもたず、にげ場がないため、すぐ狩られてしまった。）
・シカ　……少くなったもよう、しかしまだどこにもいた。
・ニホンカモシカ　……林転のあとの若い桧山によく姿が見られるようになる、広域林転のあとの桧の苗木をしごいたのもこの頃である。カモシカは、今までの自分のなわばりの食事道に餌が全くなくなり　かわりに桧の苗木があるので当然桧の苗木をしごいて食べる。
・オシドリ　20～30羽の群がまだ川の源流には、よく見られた。
・キツツキ　……少くなる。奥地でも木をつつく音があまり、聞かれなくなる
・山ドリ　……半減、それ以下。
・アメノウオ　……少くなる。しかしまだ、源流の各谷の淵にはそうとうみられた。

○ 昭和50年頃

・ニホンオオカミ……1匹、（生きのこり、牡と思われる）53年冬まで、2月には、必ず大塔山近くに来ていた（餌につく）交尾のため、牝をさがして、大塔山に来ていたもの、どこにいても2月頃には、その山系の尾根が集まっている一番、高い山には、必ずくる、又この頃、大塔山近くの谷で密猟されたカモシカの皮を数から引っぱり出して食べていた。（毎冬、20程）
53年冬より後は全くこず、死に絶えたもよう。
・山犬　……いなくなってしまう、（オオカミより先にいなくなる　50年頃までに）
・イノシシ　……最近急に減少した。（55年頃）このままでは、絶えるのではないかと考えられる、わずかに海岸近くの雑木山にいる、イノシシも大塔山を中心として尾根がわりをして交流して生活している、特に交尾期には、尾根道を通って　各方面から相手を求めて、大塔山近くに集まる、最近、奥地まで道がついたため、大塔山近くまで狩りに行き　この交尾に集ったイノシシを狩ってしまうため増えない
・シカ　……奥地では、非常に減少した。（奥地では牝もどんどんとってしまう）シカも大塔山ふきんに多くあつまることがある。
・ニホンカモシカ……奥地では、広域の林転が進み、林転後10年もたつと、下草がぬけ　食物がなくなり、大塔山系の東南側の太田川源流、ふきんや、その続きの海岸よりの平たん部に移住する。又、奥地では大型獣の減少にともない、カモシカの密猟が多くなる。一冬に50～が多いときには100も狩られているもよう、奥地では、非常に減少した。
・オシドリ　……10～20羽の群が川の上流の方にぱらぱらと見られる。
・山ドリ　……非常に少くなった。
・アメノウオ　……非常に少くなった、林転の後のがケくずれと、砂防工事のため、土砂にうずもれてしまって、源流の谷がなくなってしまった。
・ツキノワグマ　……57年1月大塔山南側、崩の川ふきんに二頭うろついていた。

動物がいなくなった理由

1、国有林の林転、雑木林がなくなるので食物がなくなる。（葉、実）
2、林転のとき申しわけていどに所々に残した雑木林に動物が集まるため、たいへん動物が狩りやすくなり、狩られてしまう。
3、奥地に道がついたため、今まで行かなかった、源流ふきんにまで行って動物を狩ってしまう。そのため動物が最後に、にげこむ所がなくなった、特に交尾のため源流ふきんに集まった動物を狩ってしまう、
4、林転のあとのがけくずれ（林転の出来ない急な斜面を無理に林転する）、その後、必ず崖くずれがあり、その砂防工事で谷がうずもれて、なくなってしまい、魚の住む谷がなくなる、

◎ 一番困ることは、川に安定して水がなくなる。今の植林は、下草を早くなくすため、密植する。そのため、木が大きくなると、植林地には、草一つなくなり、山の斜面は、運動場のようなざらざらした地はだになってしまい、落葉も、雨ですぐ流されてしまい、山に保水力がなくなる、降った雨は、一度に流れてしまい、少し日照りが続くとすぐ谷が干上る。

林転をする順、1、国有林、2 官公増林（県）3 区有林、個人所有も奥地に林道がつけばだんだんと林転するものと考えられる。

※ 川の源流だけは、もうこれ以上林転すると、とりかえしのつかないことになると考えられる、
動物に最後に、にげこむ場所をつくってやる必要がある

1) 大塔山、山岳地

○ 大塔川、赤木川、古座川、日置川の源流であり、800～1000mの山がかたまっている。日本列島が始まってよりのそのままの原生林が残されており、本来のニホンカモシカの棲息地である。山が大きく、崖山が多く、この崖山に、カモシカの家（テリトリー）が昔から出来上っており、カモシカは、それを代々うけついでいる。……（そしてこれよりはみ出したものは、ニホンオオカミの餌となっていたもよう。）

※ 今のまま、雑木林が残されるとすると、カモシカの家（テリトリー）がやく100程のこる。この100の数がカモシカ100頭が完全に生きられる数であり、増えても200は養いうるものと考えられる。それ以上は、むりであろう。

2) 太田川源流ふきん。

○ 雑木林が多く残されている。500m以下、200～300mの小さい山が連なっている。
最近（50年頃より）急にカモシカの増えた地域である。大塔山周辺の広域の林転のため、住み場所のなくなったカモシカが移住して来たのが主な理由と考えられる。
岩山が多く、一見カモシカの棲めそうな山に見えるが岩が大きく、カモシカも上れない。岩山が多く、犬に追われるとすぐ追いつめられてしまう。しかし昔からのカモシカのクラ、（カモシカの立ち場）も5～6ケ所はあり、10ケ所程は、昔からのカモシカの居場所は、あったもよう。
しかし、このカモシカの居場所より、カモシカが増えたということは今までなかった。大塔山、山岳地の本来の居住地ではみ出したカモシカの居つく場所のようである。
（昔からいっ行っても一頭いたとのことである。）

現在、この太田川源流、そして、その周辺の続きの山をふくめると、100～200、それ以上もいるもよう。一ケ所に5～10もかたまっているところもある。非常に過密の状態である。

しかし、完全棲息の場所というと、少く、10～20、増えてもせいぜい50まで。それ以上は無理と考えられる。

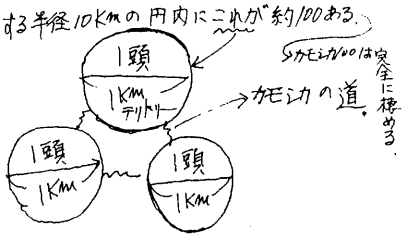
※ 今後の問題の地である（時に対人関係、それにカモシカ自身の問題。

3) 鳥帽子、大雲取、自見山、の山岳地。

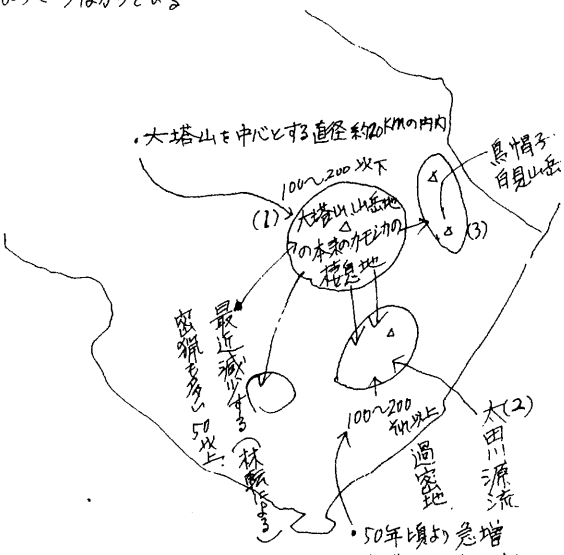
○ 山が大きく、800～900mの山が連なっており、これから熊野川を渡って、三重見、蔵光山に続く山岳地は、本来のカモシカの棲息地であるが、ほとんど林転されてしまって、雑木林は非常に少い。しかし、残されている雑木林は、崖山で高地であり、昔からの完全な棲息地であるが、場所が少いため、10～20、棲息出来ればよい方だろう。

※ ニホンオオカミは、明治末ジステンパーにより、大量にごくみじかい期間に死滅してしまったが、奥地には、ジステンパーの入らない地域もあり、生き残ったニホンオオカミもあった。以後くりかえし流行する、ジステンパーにより、漸次死滅していったものと考えられる。

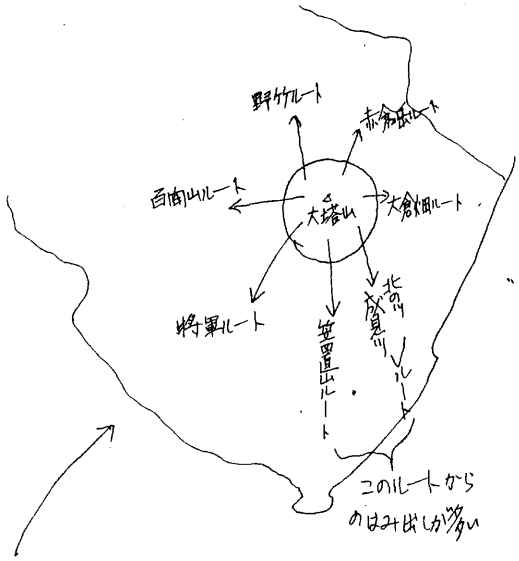
- しかし紀伊半島には、太古からの原生林が多く残されており、戦後も最も奥地の原生林のカモシカの崖山を過ごして生きているニホンオオカミが、各山系に少しずつ残っていた。
- それが、戦後行われた、紀伊半島奥地の大開発により、カモシカの崖山が切り拓かれると、姿を見せ、オオカミがいる、いないと言われているうちに、最後に残った大塔山系奥地の原生林の切り拓いを最後に完全にこの日本から姿を消してしまったのである。
- なおニホンオオカミは、明治に捕えられてから以後世に出てないから、いないものと思われているが、そのものずばりは、出ていないが、戦後、炭焼の牝犬と交配するという形では、紀伊半島奥地では、何匹も山から出ていた。



・大塔山、山岳地のニホンカモシカは、それぞれ、生活圏をもっており、場所により大小はあるが、崖場、谷をふくめて、やく1Km程の円内にやく一頭である。そしてその場所は昔からきまっており、代々ケツがれているもよう。又、これら生活の場は皆カモシカの道によってつながっている



・50年頃より急増
大塔山、山岳地より移住して来たもの。



・大塔山、山岳地からのカモシカのはみ出しルート

ニホンカモシカ

※
- 大塔山、山岳地の本来の棲息地で減少（広域林転、密猟）　100～200以下
- 太田川源流ふきんで急増（主に大塔山の本来の棲息地から移住して来たもの）、100～200、以上。

今後この移住地で生られるか、1. 昔からのカモシカの居場所が非常に少い。山が深いため、猟師がはっちゅう行き（里がちかく、畑に出る、）どこにどんな木があるまで知っている程。対人関係
2. カモシカ自身の問題（テリトリーが出来上るか、病気にかからないか、）

S. 20年

20〜25年まで
昭和[redacted]

みどり 雑木林 原生林 80%以上

そら色 杉、檜 人造林 80%以上

◎○は大型獣類 交流の中心

・動物保護地として最もよい場所。

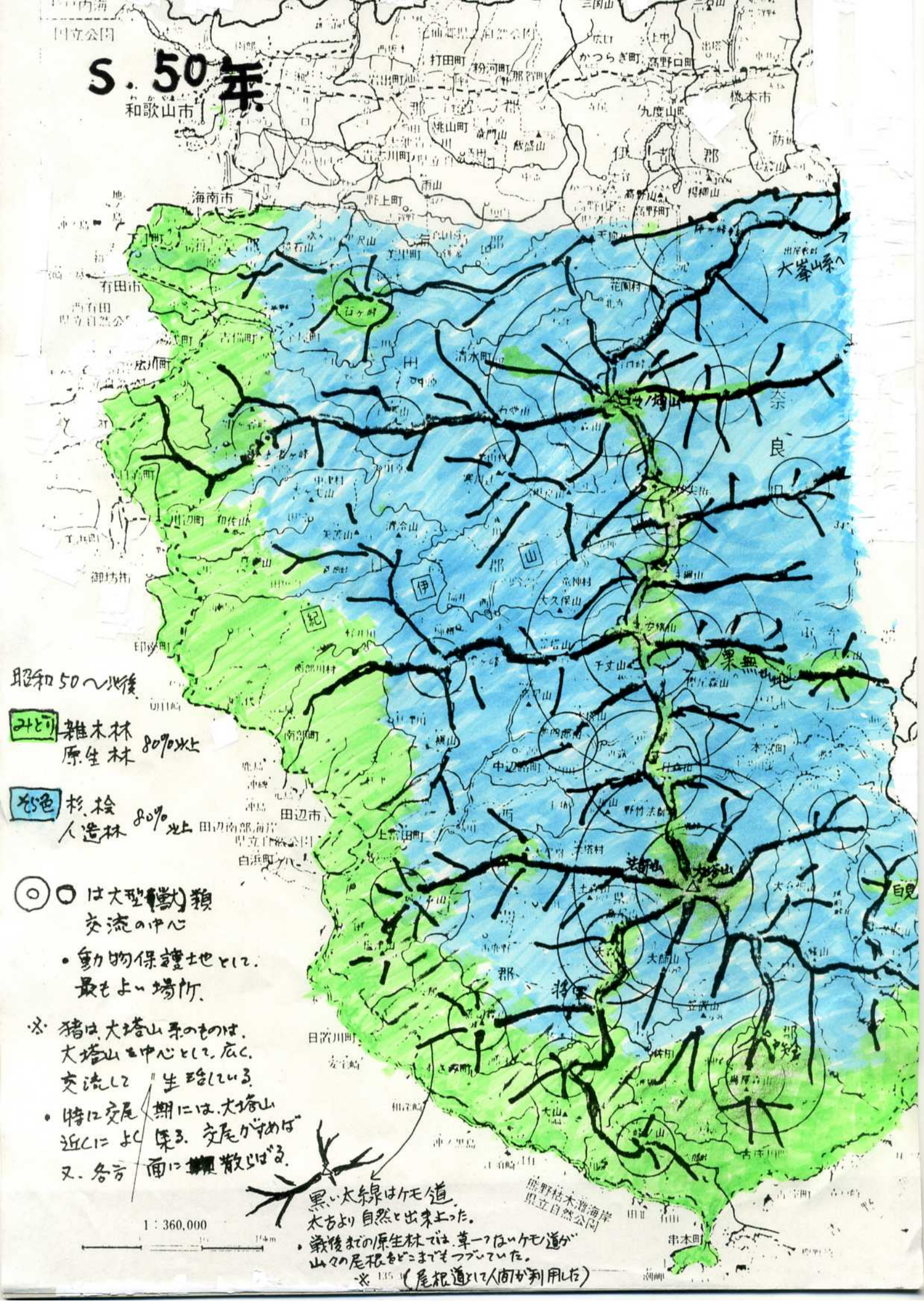
※ 猪は、大塔山系のものは、大塔山を中心として、広く、交流して生活している。

・特に交尾期には、大塔山近くによる。交尾がすめば又、各方面に散ばる。

→黒い太線はケモノ道。太古より自然と出来上った。

・戦後までの原生林では草一つないケモノ道が山々の尾根をどこまでも続いていた。

(尾根道として人間が利用した)


S. 50年
和歌山市
海南市
有田市
田辺市
大峯山系へ
奈良県
伊紀山系
果無山脈
大塔山
白見
熊野
昭和50～以後
みどり 雑木林 原生林 80%以上
茶色 杉、檜 人造林 80%以上
○ は大型(鳥)類 交流の中心
・動物保護地として最もよい場所
※ 猪は、大塔山系のものは、大塔山を中心として、広く、交流して生活している
・特に交尾期には、大塔山近くによく集る。交尾がすめば又、各方面に散らばる。
黒い太線はケモ道
太古より自然と出来上った。
・戦後までの原生林では、草一つないケモ道が山々の尾根をどこまでもつづいていた。
※ (尾根道として人間が利用した)
1 : 360,000